



# 「戦争作家」と呼ばれて

— 火野葦平と文化人公職追放 —

ノンフィクション作家 三山 喬

西部軍管区報道部の中心人物として敗戦を迎えた火野葦平は、岩下俊作や劉寒吉など『九州文学』の作家仲間らと焼け野原の福岡市に留まって、「九州書房」という出版社を立ち上げた。だが敗戦を境に価値観が一転した世の中で、その去就には厳しい視線が注がれた。

## さらしものとなった苦惱

「私は、さまざまの角度から照射されて、さらしものやうになった。これに耐へることは容易ではなかったが、私は菌を食ひしばつたのである」

昭和二十六（一九五二）年に発表した小説『追放者』

誠実であることによつてくりかへした誤謬、愛の認識によつてたどりついた過失、しかしその陥穽のなかに、私は別の生きる道の灯を見るほかばなかつた。私を鋭いまなざしで、批判したり、追放したりしないのは、家庭だけであつた。卑怯者であるよう。家庭のなかへ逃げこむことで。心の傷を癒すより、今は方法がない。さらに、それは、（両親と妻、七人の子を養う）その生活が私の一身にかかつてゐることで、私はまた世間へ醜骸をさらさなければならなかつた。私はほとんど無一文であるばかりか、すでにそのとき売れるものは売りつくし、方々に借金のお金をこしらへてゐた。（略）若松の住家のまはりにある借家十数軒も、港運会社へわづかの金で譲渡した。（略）九州書房と、（福岡で開業する準備を進めていた）おでん屋「川太郎」とは、私の生活上の真剣なプランだつたのだ。

火野の周辺には、地元の大政翼賛会の事務局長だった若松の市議会議員や元憲兵など、昭和二十一（一九四六）年からの公職追放で、すでに処分を下されている人たちもいた。

で、火野自身は戦後の日々をそう回想する。たとえば九州書房の設立時、地元紙『西日本新聞』に載った投書には、こんな刺々しい言葉が散りばめられていた。

「戦争文学で地位を得た」兵隊作家が、いま転身の姿鮮やかに、（新規ローカル出版社の立ち上げという）文化運動の指導者として乗り出し始めたことを（略）甚だ遺憾に思ふ」

「（火野はむしろ）潔くペンを折るべきではないか」

「兵隊もので儲けた一切の利潤を、ことごとく戦災者のために投出してはどうか」

まるで針の筵に座らされたかのような状況への苦悩を、火野はこう表現した。

「私もいづれ追放になるかも知れぬ身だ」。火野もその覚悟を決めていた。「該当者のうち文筆家は個人審査になるので、後まはしにされてゐることだつた」

## 文筆家たちへの処分

GHQが発表した「公職に適さざる者」は七分類。A（戦争犯罪人）、B（職業軍人）、C（超国家主義団体などの有力者）と続く最後の項、G「その他の軍国主義者・超国家主義者」はさらに三つに分類され、その三番目が「日本の侵略計画に関し政府に於て活発且重要な役割を演じたるか又は言論、著作若は行動に依り好戦的国家主義及侵略の活発なる首唱者たることを明らかにしたる一切の者」となっていた。文筆家の処分はこの物差しで測られた。

一線を退いて久しい火野の父・玉井金五郎はすでに老齢で、火野の顔を見るたびに「お前も追放になるのか」と尋ねてきたという。

「まだ、はつきりしませんけど」